



第20回

福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2009

報告書

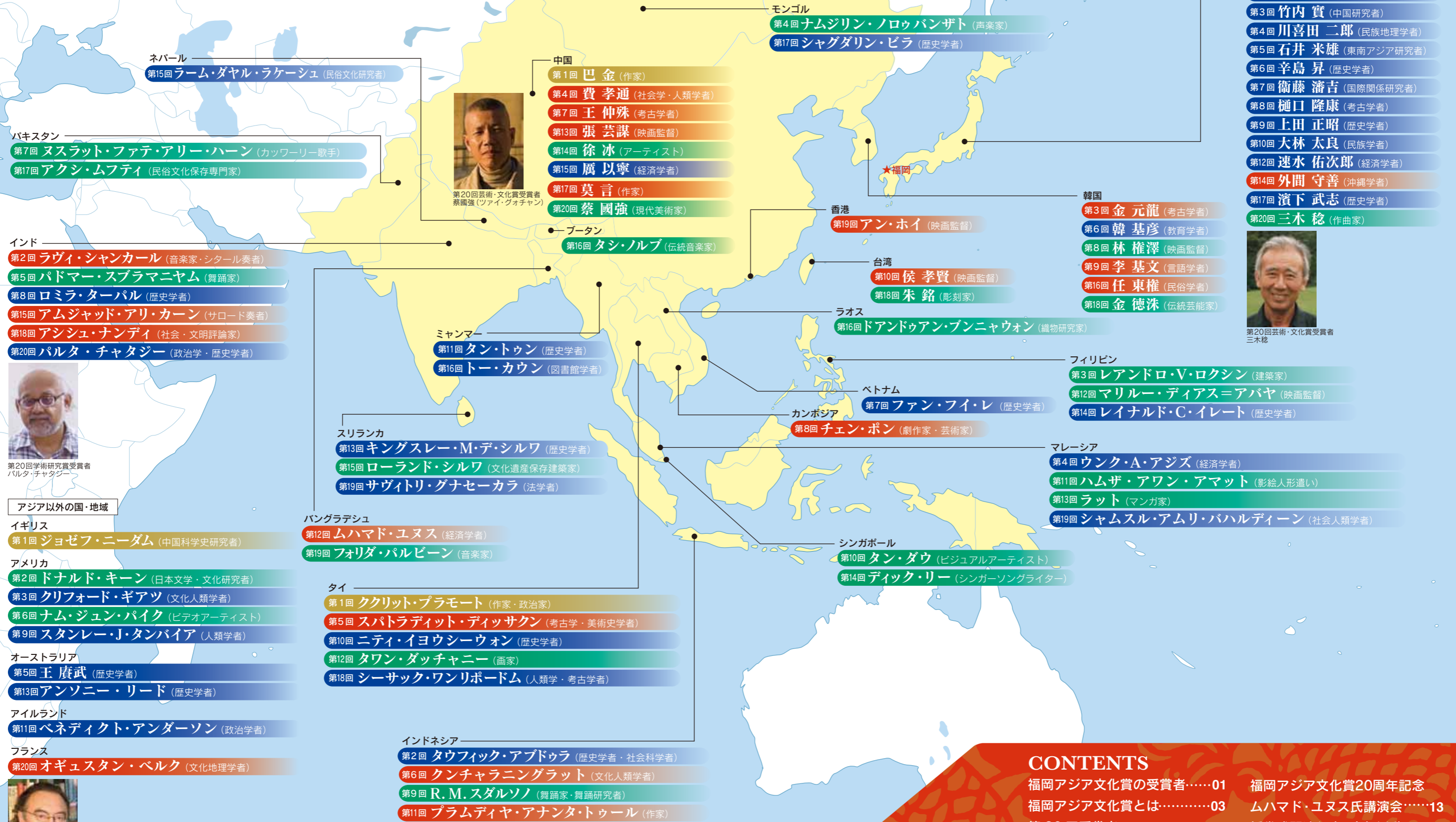
主催 福岡市
財団法人よかトピア記念国際財団
後援 外務省

第20回 福岡アジア文化賞 報告書

発行/福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市国際部内
Tel 092-711-4930 Fax 092-735-4130
e-mail acprize@gol.com
<http://www.asianmonth.com/prize>

福岡アジア文化賞の受賞者

■ = 創設特別賞 ■ = 大賞 ■ = 学術研究賞 ■ = 芸術・文化賞



第20回芸術・文化賞受賞者 三木稔

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者……01	福岡アジア文化賞20周年記念
福岡アジア文化賞とは……03	ムハマド・ユヌス氏講演会……13
第20回受賞者	授賞式関連行事・広報活動……15
オギュスタン・ベルク……05	歴代受賞者名鑑……17
パルタ・チャタジー……07	
三木 稔……09	
蔡國強……11	



福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、20年間で81人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。



1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人または団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大賞 (賞金 ¥5,000,000)	アジアの文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより世界に対してアジアの文化の意義を示したものの。
学術研究賞 (賞金 ¥3,000,000)	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献したものの。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる
芸術・文化賞 (賞金 ¥3,000,000)	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成や発展に貢献したものの。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

3. 対象圏域

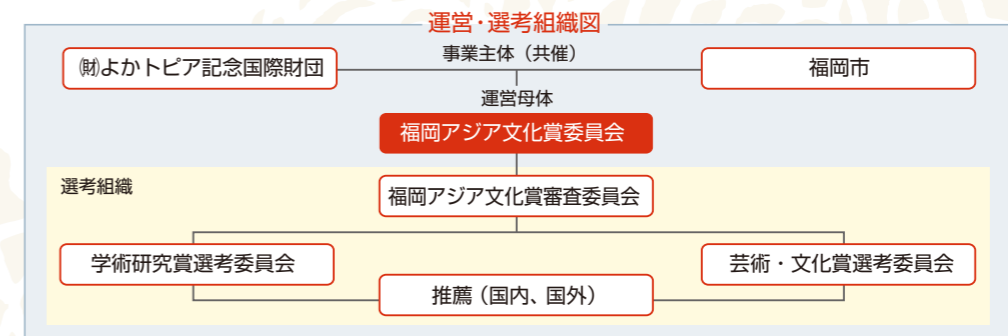
東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、財団法人よかとピア記念国際財団

5. 運営・選考組織

- 福岡アジア文化賞委員会
賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。
- 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会
各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選出し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で当該受賞候補者について審査し、受賞者を決定します。
- 推薦依頼
広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。



第20回福岡アジア文化賞のあゆみ

2008.07	54カ国・地域約7,400人に第20回受賞候補者の推薦を依頼
2009.01	芸術・文化賞(24日)、学術研究賞(25日)各選考委員会
2009.02	審査委員会(28日)
2009.04	選考・審査合同委員会(26日)
2009.06	文化賞委員会、受賞者決定および福岡記者会見(8日)、パリ記者会見(25日)
2009.07	東京記者会見(23日)、北京記者会見(30日)
2009.09	授賞式(17日)、市民フォーラム(16日、19日、20日)、学校訪問(18日)、文化サロン(18日、19日)、20周年記念ムハマド・ユヌス氏講演会(27日)
2010.01	20周年記念アジア映画監督作品上映会&フォーラム(27日)

第20回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 有川節夫 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 稲葉継雄 九州大学大学院人間環境学研究院教授	委員長 小西正捷 立教大学名誉教授
副委員長 高田洋征 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授	副委員長 藤原恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授
委員 稲葉継雄 九州大学大学院人間環境学研究院教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 天児 慧 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 石坂健治 東京国際映画祭アジアの風 プログラミング・ディレクター
委員 小西正捷 立教大学名誉教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 石澤良昭 上智大学学長	委員 後小路雅弘 九州大学大学院人文科学研究院教授
委員 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 末廣 昭 東京大学社会科学研究所教授	委員 内野 儀 東京大学大学院総合文化研究科教授
委員 土屋直知 株式会社正興電機製作所最高顧問	委員 竹中千春 立教大学法学部教授	委員 宇戸清治 東京外国語大学大学院 総合国際学研究院教授
委員 西村篤子 国際交流基金統括役	委員 中村尚司 龍谷大学研究フェロー	委員 川村 湊 法政大学国際文化学部教授
委員 藤原恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 新田栄治 鹿児島大学法学部教授	委員 藤井知昭 国際文化研究所所長

2009年11月現在

第20回大賞受賞者



オギュスタン・ベルク

Augustin BERQUE

フランス／文化地理学
フランス国立社会科学高等研究院教授

受賞理由

フランスにおける日本学の第一人者であり、文化地理学者。欧日の人間社会と空間・景観・自然に対する哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献し、国際的に高い評価を得ている。

主な経歴

1942	モロッコ・ラバトに生まれる	1984-88	東京・日仏会館フランス学長
1969	パリ大学第3課程博士号(地理学)	1991	フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲
1970-74	北海道大学フランス語講師	1995	第16回日本文化デザイン賞受賞
1977	パリ第4大学博士号(文学)	2005-06	京都・国際日本文化研究センター客員外国人研究員
1979-	パリ・フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)教授	2006	日本建築学会賞文化賞受賞
1981-99	EHESS 現代日本研究所(現日本研究所)所長		

文化と自然の中に、普遍的な人類のルーツを探して

今回の受賞をことさら光栄に思っているのは、アジア人ではなく、東洋学を研究している西洋人の地理学者である私が賞をいただけたからです。

私は、あらゆる風土がそれぞれに唯一無二の存在であることを十分認識しつつも、地理学者として物足りず、各々の文化と自然の関係性の中に、普遍的な人類のルーツというものを探し求めてきました。

私をこの道へ導いたのは、和辻哲郎という日本人の哲学者です。和辻先生はこの道を「風土学」と呼んでいました。私は、和辻先生の時代や彼の立場では入手できなかった西洋と東洋(中国)の資料を参考に、さらにこの道を進めてきました。文化帝国主義でもなく、各文化が自分の殻に閉じこもるものでもない。特に東西間の文化交流について私が思うのは、まさにこういった状況です。今後もこうした交流がずっと続いていくことを願ってやみません。

(授賞式スピーチより)



学校訪問

実施日／9月18日

会場／福岡県立修猷館高等学校

講堂に集まった1、2年生を前に、どうやって日本と出合ったかに始まり、哲学者和辻哲郎の著書「風土」が自身の研究テーマの方向性を決定づけたことやこれまで研究してきたことなどを、日本に滞

在していた時のエピソードや思い出を交えながら分かりやすく語りました。

北海道開拓時代に入植した農民たちが、不可能とされていた北海道での稲作を成功させたことを例に挙げて、風土とは環境そのものではなくそこに住む人間の主体性を通じてとらえた環境であることなど興味深い話が続き、また、日本をはじめ先進国では風土性がなくなり画一化が進んでいることにも触れ、「風土性を保ちながらも世界の良い面を取り込んでいくことが大切」と訴え、生徒たちがいま一度日本の風土について考えるきっかけとなるような講演会となりました。閉会後は場所を移し、生徒代表7人との懇談会。

約800人の生徒がベルク氏の話を興味津々の面持ちで熱聴



講演後、生徒が感謝の気持ちを込めて花束を贈呈



4年間の北海道生活はとても楽しく、冬場は2、3度はスキーに出掛けていたなどというエピソードも

生徒からのいろいろな質問に丁寧に答え、時折笑いが起こる和やかな時間となりました。

市民フォーラム

開催日／9月19日

会場／イムズホール 参加者／250人

「風土と日本 ～グローバルな視点へ～」

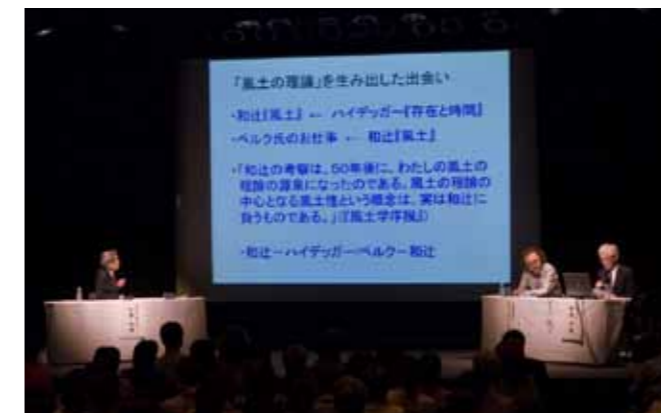
通算15年に及ぶ日本滞在から独自の風土性を見いだしたオギュスタン・ベルク氏の基調講演の後、石澤良昭上智大学学長をコーディネーターとして野澤秀樹九州大学名誉教授を交え、さまざまなアングルから風土へのより深い考察が展開されました。



環境だけでなく、住む人の主体性も“風土”

私は地理学を学びつつも東洋学を目指し、哲学者和辻哲郎の「風土」(1935年出版)と出合いました。そして現象学的解釈学を擁護しつつ地理学上の問題に存在論を導入した和辻の“風土”について考察するようになったのです。和辻のいう風土とは環境そのものではなく、その土地に住む人間の主体性を考慮するという。その風土に住む人たちがどう知覚し考えるかを把握できなければ、風土の現実を理解することはできないのです。

私はかつて札幌に住み、明治期の北海道開拓をテーマの一つにして研究しました。その時代、北海道では科学的には不可能とされていた稲作が、農民たちの米作りへの強い意志や努力、そして自然の突然変異で寒さに強い品種米が生まれたことで可能になりました。その米は北海道の外で育てるとやや風味に欠けるため、ただの雑草として処分されたでしょう。しかし、北海道ではこの稲作の成功が契機となり、北海道の風土性の中心に位置づけられます。風土性とは主観(そこで生きる人たちがどう感じるか)と客観(自然や風景など)の両面を持ち、この二つの関係は人間における「人＝個人」と「間＝社会的な面」とも解釈することができます。双方が作用し合い組み合わせられてつくられる「通感性」が風土や人



をつくり上げているといえます。

さて、現在、日本をはじめいろいろな国の風土性の画一化＝ファスト風土化が問題視されています。近代文明への警鐘は私の新たな研究テーマでもあります。環境、人間の住まいそのものが危機を迎えている今、我々は機械論的(物理主義的)ではなくもっとクリエイティブな住み方をしていかななくては。「詩人のように人間は住まう」というハイデッガーの有名な言葉もあります。明日の世界をつくるには詩人のごとく心豊かに住まいを創造していかなければなりません。

パネリスト

野澤 秀樹氏(九州大学名誉教授)

ベルク氏は和辻の「風土」のいろんな不十分さを補い、より精緻(せいち)なものとしたといえます。風土は特殊性と普遍性という二つの面を持ち、それらが通じ合って一定の方向に行くという通感性の概念によって風土学を深化させてきました。ベルク氏にとって風土学は日本理解に大きくかわり、さらに社会科学、環境科学、倫理、哲学、思想など地球規模のテーマの基本に風土概念があるという見地でさまざまな示唆をされています。



コーディネーター

石澤 良昭氏(上智大学学長)

東洋的な思想の中には言葉にはしないけれど理解してほしいという察しの理論のようなものがあります。それが和辻の中に出ていけるとすると、それをもう少し目に見えるかたちにして風土学を大きく発展させたのがベルク氏。日本語の裏には日本独特の基礎文化的なものも隠されており、それゆえ日本語はベルク氏の研究の一つの材料になったということが分かりました。

文化サロン

実施日／9月18日 会場／西南学院大学

和田光昌教授をコーディネーターに在学生を中心とした約30人が参加して「風土・風景・風雅—生きる空間の日仏比較」を主テーマとしたディスカッションが行われました。まずはベルク氏の「風土性とは人間存在の構造契機である」という解説からスタート。その後は参加者から質問や意見などが数多く出され、宗教、文化、建築、景観、自然に関しての日本と西洋やフランスとの違いから、文化水準を高めて次の歴史的段階に行くべきなど、これからの展望にまで話は及

びました。参加した同大2年の水町まどかさんは「とても有意義な内容で特に科学者にとっての環境と生物にとっての環境の間、つなぎ目を理解する必要がある」ということを再認識しました」と感想を述べました。



VOICE)))



「特に通感性や北海道の稲作の話が印象的でした。私は環境が人をはぐくんでいくと思っていますが、現在の社会状況からも私たち日本人は風土についてもっと掘り下げていく必要があると感じました」池田元輝さん(福岡県新宮町)

第20回学術研究賞受賞者



パルタ・チャタジー

Partha CHATTERJEE

インド／政治学・歴史学
コルカタ社会科学センター政治学教授

受賞理由

アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきたアジアを代表する政治学者・歴史学者。サバルタン(下層民衆)研究の中心に立ち、これまで顧みられなかった「民衆の政治」を明らかにすることに尽力し、アジアから生まれた学問が世界に貢献しうること示した。

主な経歴

1947	インド・コルカタに生まれる	2001	ドイツ・ベルリン高等研究所研究員
1971-72	米国・ローチェスター大学博士号(政治学)	2003	アイルランド・ダブリン、トリニティ・カレッジ特別客員研究員
1973	コルカタ社会科学センター政治学研究員(1979-教授、1997-2007 所長)	2006	米国・プリンストン大学人文科学センター研究員
1989-91	ニューヨーク・社会研究新学院客員教授	2007-	コロンビア大学中東アジア言語・文化教授
1993	オランダ・ライデン大学客員教授		
1997-	米国・コロンビア大学人類学教授		

批判的な目を向けて、歴史に問い掛けることが重要

一つの国の歴史には、さまざまな現実が積み重なっています。そこに批判的な目を向けて問い掛けることが、特にインドにとっては重要でした。歴史学は、あまり生産的な仕事ではないかもしれませんが、今まで人が発見していない事実突き当たると、まるで金の鉱脈を掘り当てたようなワクワクした喜びを感じます。(学校訪問での講演より)

生まれ故郷のコルカタと福岡には、近代史において一つの共通点があります。地理的・歴史的立場から、外部の影響をたくさん受け、それが人々の生活や人柄、社会制度を形づくってきたという点です。私は幸運にも、地方が直接海外と交流するという伝統を受け継ぐ一人となりました。「今の時代、コルカタには国際的に通用するレベルの学術研究は無理だ」という声も聞かれますが、それは間違っていることが、今回の受賞で証明されました。

(授賞式スピーチより)



学校訪問

実施日／9月18日
会場／西南学院高等学校

西南学院高等学校チャペルで、同校3年生450人を前に約50分間の課外授業が行われました。

冒頭でチャタジー氏は自らの生い立ちに触れ、小さいころはサッカーの選手になりたかったこと、アメリカの大学に留学して歴史や政治を学んだこと、当時の母国のすさんだ状況などを話しました。さらに、200年にわたってイギリスの統治下にあったインドの歴史や経済発展について、大国の支配を受けていない日本との違いを交えながら話しました。その中で「目の前の現実だけが本当の姿だと思わないで。その背後にある見えないものは、語られないことを掘り下げ、さらには将来へのつながりにも疑問を持つてほ

しい」と、批判的な目で問題提起することの大切さを訴えました。

途中、緊張がちに聴いている生徒たちに向かって「歴史が好きなのは?」「どの時代がおもしろいと思う?」「歴史学者になりたい人は?」などと問い掛ける一幕も。最後に、歴史を学ぶことの喜びや意義を熱く語り、生徒たちへのメッセージとしました。



講演後、女生徒が英語で謝辞を述べました



歴史学の重要な点や興味深さなどが、生徒たちの心に刻まれました



「福岡の高校生の前で話ができることは、思いがけない喜びです」

市民フォーラム

開催日／9月20日
会場／イムズホール 参加者／150人

「声なき人々の歴史を語る」

パルタ・チャタジー氏と、国際政治とインド政治が専門で、チャタジー氏の共著書の翻訳も手掛けた立教大学法学部教授の竹中千春氏を迎え、対談が行われました。民衆を主体とした歴史をどう掘り起こし、未来へつなげていくのか示唆に富んだ内容でした。

歴史が新しい知識の力をつくり出す

竹中 私がインド研究を始めたときの師ともいえるチャタジー先生のお話を、今日は皆さまと共にじっくり伺いたいと思います。

チャタジー 私が歴史家としての仕事を始めたとき、自由の闘争に参加した普通の人々の経験を話してもらった機会がありました。その内容は、エリート層によって語られている歴史とは大きく違っており、さまざまな疑問がサバルタン(下層民衆)研究に集結しました。

インドがどのようにしてイギリスの支配から独立したかを見る際に、サバルタンの人々の独自性を取り上げることが、歴史家がやらなければならない重要な仕事だと思いました。サバルタン層の自立・自治があったという証拠を探すのは、大変なことでした。政府や警察の報告書、あるいは新聞などには、下層階級の人々の声は記録されていません。当事者に直接会って話を聞くという方法も取りましたが、20~30年前の記憶を話してもらうことには難しい側面がありました。表に出ることのない人々の声を正確に掘り起こし、それをきち



んと表すために、私たちはさまざまな方法を模索しました。インドの民主主義は他の国とは違い、貧しい人たちがほど選挙に参加し、代議制を利用して生活の権利などを主張します。サバルタンと政治のそのような関係は、運動が始まった時代から現在までずっと続いています。

竹中 インドは広い国土と長い歴史を持つ国ですが、ここでインドの豊かさについて説明していただけますか。

チャタジー インドには多数の言語があり、それぞれが地域に根差し、言語の周りにその地域の文化が形成されてきました。それぞれの言語が独自の文学・演劇・映画・芸術的作品などを持っていますから、インドの文化には非常に多様性があるのです。

竹中 「民衆の歴史」を取り戻し、それを書き留めていくサバルタン研究は、学校教育や社会においてはどのような意味がありますか。

チャタジー インドには国が定める公式な教科書もありますが、それを使わず独自の教科書を使っている地域もあります。サバルタン研究に刺激を受け、新しい人民の歴史を取り上げた教科書も使われるようになってきています。

竹中 インドの人々は、自分たちの歴史をより豊かに、より深く、多くの人に加わる歴史として作り上げてきました。過去は死んだものではなく、むしろ現在と未来に向かって、新しい知識の力として作り出していくものだとすることを、サバルタン研究は教えてくれたように思います。

文化サロン

実施日／9月19日 会場／福岡大学

『パルタ・チャタジー教授を囲む会-「民衆の政治・歴史」を語る-』と題した、大学研究者との交流会。コメンテーターに立教大学教授の竹中千春氏、長崎県立大学教授の長島弘氏、福岡大学教授の松塚俊三氏を迎え、福岡大学教授の石上悦朗氏の司会で進められました。

前半は、チャタジー氏がサバルタン研究の起りや経緯などを紹介。後半はコメンテーターから「最近のサバルタン研究のテーマは?」「なぜサバルタンという一般的ではない言葉を使う

のか」などの問いが、参加者からは「植民地時代のサバルタンについての見解は?」「低カーストの女性が政治参加を果たす意味は?」などの質問が相次ぎました。その一つ一つにチャタジー氏は丁寧に答え、サバルタン研究への理解を深める有意義な時間となりました。



VOICE



「日本では政治参加の意識が薄れているだけに、自分と政治と文化のかかわりを考える上で、非常に得るものがありました」溝口孝司さん(福岡市中央区)。「メディアを通さなくて世界を感じる、いい機会でした」広美さん(同)

第20回 芸術・文化賞受賞者



三木 稔
MIKI Minoru

日本/作曲

受賞理由

日本のみならずアジアを代表する作曲家であり、連作オペラをはじめとする作品群は国際的に高く評価されている。邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした。

主な経歴

1930	徳島市に生まれる	1994	紫綬褒章受章
1955	東京藝術大学音楽学部卒業	2000	セントルイスオペラ劇場委嘱オペラ《源氏物語》世界初演。旭日小綬章受章
1964	日本音楽集団を創立、20年にわたって作曲・音楽監督などを務める	2002	アジア最高のソリストによる「アジア・アンサンブル」創立、現在芸術監督
1973-2003	東京音楽大学非常勤講師（2004-07 年客員教授）	2006	新国立劇場委嘱オペラ《愛怨》世界初演。東西音楽交流の実践の場として北杜国際音楽祭を創設、現在芸術監督
1993	日中韓の民族楽団「オーケストラ・アジア」結成、9年間芸術監督		

日本・アジア・西欧の共生を超え、「共楽」を目指す

国際性を考えながら自国の各時代を題材とするオペラ連作を作曲すること、西洋のオーケストラと民族楽器の大アンサンブルの共演で真の交響曲を創造することは、世界の誰も考えなかったことです。また、日本を含むアジアの民族楽器の現代化・国際化のために、作品創造とプロデュースの両面で献身するようなことは、誰もしませんでした。これら古今東西の境界線を歩くような仕事は、いつも「ヒマラヤの尾根を縦走する」くらい危険でときどきワクワクするものでした。

日本・アジア・西欧を平等にとらえ、それぞれのアイデンティティを生かす「共生」することの重大性を踏まえながら、それを越えた「共楽」を音楽文化の目標において努力し、50年以上になります。国際賞を持たない音楽人として「福岡アジア文化賞」はぜひ射止めたいと思っていた賞です。やっと思いかなくて、日本人として初めて芸術・文化賞を受賞でき大変光栄に思います。

(授賞式スピーチより)



学校訪問

実施日/ 9月18日
会場/ 福岡市立箱崎清松中学校

箏曲部の活動が活発な箱崎清松中学校の芸術鑑賞会に三木稔氏が出席し、華やかに音楽交流をしました。

三木氏は作品に対する思いを紹介しながら、オペラ歌手の宇佐美瑠璃さんとピアノ伴奏の柳津昇子さんに童謡「のはらうた」など自作の4曲を披露してもらいました。優しく温かい曲調に、生徒約450人が聴き入りました。

そのお礼として、同校箏曲部の20人は箏曲「石筍（せきじゅん）」を演奏。20台の琴が紡ぎだす重層な音色に、三木氏は「呼吸の合った素晴らしい演奏でした」と拍手を送りました。

その後は三木氏がマイクを握り、現代音楽に適した新箏の開発にまつわる話や、

曲作りに込めた思いなどを講演。三木氏は生徒からの質問にも笑顔で答え、「オペラ作曲で大切なことは？」という質問に、「オペラは歌や演奏、舞台美術などが集結した総合芸術。音楽を表現するための幅広い要素を勉強することが大切です」と強調しました。



生徒代表からお礼の花束を受け取る三木氏



箏曲部の演奏に、拍手とコメントを送る三木氏

市民フォーラム

開催日/ 9月20日

会場/ 福岡銀行本店大ホール 参加者/ 500人

「三木稔の音楽世界」

筑紫女学園高等学校箏曲部やRKB女声合唱団、邦楽器など演奏者、オペラ歌手などを招いて、「三木ワールド」をたっぷり堪能。現代邦楽をリードする三木稔氏自らのナビゲートにより、作品の奥深さはもちろん、邦楽の多彩かつ新しい魅力に浸った2時間半でした。

第1部 三木稔作品の魅力

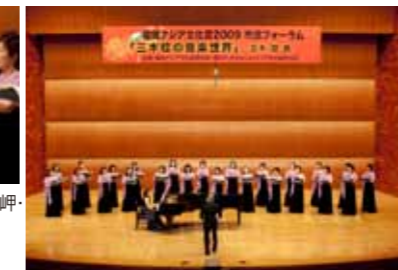
三木作品ならではの日本史を題材にした9連作のオペラを筆頭に、箏曲や合唱曲、器楽曲、声楽などを4グループの演奏者が披露し、奥深く壮大な音楽世界を描きだしました。



筑紫女学園高校箏曲部による箏五重奏曲「三つのフェスタルバラード」第3楽章 木偶まわし



RKB女声合唱団は合唱組曲「押道行」「あしたまた」を披露



オペラ歌手の宇佐美瑠璃さんとピアノ伴奏の柳津昇子さんは、オペラ《静と義経》から「愛の旅立ち」など3曲を披露し、会場を魅了



新箏や尺八などの和楽器とバイオリンやハーブなどの洋楽器の演奏者が共演し、披露したコラボレーション曲「結III Flowers&Water」

第2部 対談

国際文化研究所所長で国立民族学博物館名誉教授の藤井知昭氏と三木氏が対談。和楽器のみで構成する日本音楽集団のドイツ・ベルリンでのコンサート風景や、日本史を題材にしたオペラ《愛怨（あいえん）》などを映像で鑑賞しながら、三木作品に込められた思いや魅力について語り合いました。

《愛怨》は奈良時代の遣唐使を題材に日本と中国を舞台にした作品で、三木氏は2010年にハイデルベルクでのドイツ初演が決定したことを紹介。この日は同作品中のハイライトである琵琶演奏が上映され、巧みな技術で奏でられる美しい琵琶の音色が会場を魅了しました。藤井氏は「三木先生は日本の音楽を世界に広める役割を果たしました」と称賛の言葉を贈りました。



文化サロン

実施日/ 9月19日 会場/ ソラリア西鉄ホテル

三木稔氏と夫人の那名子さんを囲んで語り合う文化サロンには、九州・沖縄を中心に作曲活動を行う7人が出席。三木氏の創作活動やアジアの音楽などについて語り合いました。

ライフワークは「アジアとオペラ」と言い切る三木氏は、21弦の開発や中国での箏曲出版活動の様子を熱く語りました。日中韓3カ国の伝統楽器による管弦楽団「オーケストラ・アジア」の結成には「西洋の音楽と好対照な東洋のオーケストラを求めて」という思いが込められていたそうです。

また、アジアの楽器や音楽ホールなどについて、出席者と活発に意見交換。九州・沖縄作曲家協会理事の田村徹氏は「話を聞いているだけで刺激を受けます」と感想を話していました。



VOICE



「日本と西洋の楽器のコラボレーションが素晴らしかった。初めて聴きましたが、あんなに美しく調和し、聴く者の心に響いてくるとは思いませんでした」長谷川さゆりさん（福岡県宗像市）、西山千里さん（福岡市中央区）

第20回 芸術・文化賞受賞者



蔡 國強 (ツァイ・グオチャン)

CAI Guo-Qiang

中国／現代美術

受賞理由

世界的に活躍する現代美術の旗手。火薬や花火を用いた壮大な野外プロジェクトに代表される独創的な手法と中国伝統の世界観に根差した表現で、今日的な問題意識と根源的で普遍的な生命力を持つ作品世界を生み出し、芸術表現の新たな可能性を拓き続けている。

主な経歴

1957	中国福建省泉州市に生まれる	1999	第48回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際金獅子賞受賞
1981-85	上海戯劇学院舞台美術科に学ぶ	2001	アジア太平洋経済協力 (APEC) 会議上海総会で花火プロジェクトを行う
1986-95	日本に滞在	2007	第7回ヒロシマ賞受賞
1989	外人のためのプロジェクト (以後10年にわたり約30回実施)	2008	北京オリンピック・パラリンピック開閉会式芸術および視覚特殊効果監督を務める
1995	渡米 (以後ニューヨーク在住)		

福岡に来てアジアに戻った。日本に来て宇宙に近くなった。

私は、福岡が持つアジアへのメッセージや考え方に影響を受け、アジアについて考え始めました。アーティストとしてアジア文化を位置付けようと思いました。だから、福岡に来て私はアジアに戻ったといえます。また、日本の近代化が西洋化し過ぎたのではという反省の時代、私自身もアジア人の一人として考えました。そしてもっと大きい宇宙的な視野で仕事をしていこうと決意しました。日本に来て、私は宇宙に近くなったのです。

世界で仕事をしていると、アジア人として特別視されてしまう一方で、良いこともあります。それはアジアの思想が持つ自然との対話によってすごいスケールの作品を作ってしまうこと。もう一つはアジア文化の中にある他文化を尊重し大切にするという哲学によって、どの国でもいろんな人と対話しながら、いい仕事ができるということです。だから今、そのおかげでこのような素晴らしい賞を頂けるのだと思います。

(授賞式スピーチより)



特別企画 「創造の楽しみ」蔡 國強 若者と語る@福岡アジア美術館

実施日／9月18日
会場／福岡アジア美術館



難しいからこそ楽しくやりましょう。

世界的アーティストを前に、福岡の大学院に通う5人のアーティストの卵たちが自作のプレゼンテーションを行い、アドバイスしてもらおうというドキドキの企画。「作品はアーティストの個人的な世界であり、表面的なものや内面的なものはときに全く違います。だからアーティストの作品を皆さんの前で批評するのはとても難しい」と話しながらも、蔡氏は学生一人一人の作品に丁寧にコメントしました。

緊張した面持ちでプロジェクトに作品を映しながらプレゼンする学生に、蔡氏は構図の面白さやデッサン力、表現方法について感想を述べながら、中には作品に隠れた作家の内面世界にまで言及するなど、学

生たちには貴重な体験となりました。アーティストであり続けることの難しさを感じながら、楽しくやるのが大事と話すと蔡氏は、最後に「皆さんはすでに完成度の高い作品を作っています。でも、大変なのはこれから。もっと自分の内面世界をさらけ出してください。自分の弱い部分、強い部分などと直面して対話する。その中には日本人の文化やアジア人の可能性も含まれるでしょう。可能性は一步深い自分の中にあるのです」と期待を込めてエールを送りました。また、よいアーティストについて「深く考えて複雑なことを簡単に表現する」と指摘。学生たちは蔡氏の言葉を熱心に受け止めていました。

市民フォーラム

開催日／9月16日

会場／アクロス福岡イベントホール 参加者／250人

「アートに何ができるのか」

これまで世界の美術展などで話題を呼んだ作品やプロジェクトの紹介を交え、アートの持つさまざまな可能性を示してくれた蔡國強氏。作品同様、トークでも聴衆を存分に引き付けました。



アートへの熱い思い、そして可能性を探る

アジアでは現代美術の展覧会にあまり観客が入らず、一部の人のための娯楽となっています。社会や時代にメッセージを送り、新しい表現を生み出すなど、伝統美術より一般の大衆に近いところにあるにもかかわらず、なぜかあまり愛されない。それはおかしいじゃないかという思いから、今回のテーマを選びました。

まず、アートは「自分の人生に役立つ」。自分が楽しくないとかほかの人も楽しく感じません。だから、自分が一番見たいこと、やりたいことをする。私の場合、自分の寂しさや弱さ、社会への不満など、火薬を使った作品で発散できます(笑)。また、アートを通じて自分の思いを人に伝えることもできます。自然の美しさを表現することで心の安らぎも得られます。

社会に何か問題提起をしたいとき、アートを通じてメッセージを送ることができます。アートは「自分と社会の橋になる」のです。難しいのは、伝えたいことをアートでどう魅力ある説得力のある表現にするか。問題はアートの外で解決し、最終的にアートの力で表現しなければならない。これは私がいつも考えていることです。

アートには「人を助ける」という側面もあります。たとえば、オークションで作品を売って、台湾大地震や四川大地震などの被災者に寄付できます。また、エジプトで子どもたちと風(たこ)を作るプロジェクトを行いました。終わった後も毎年風

のイベントは続いています。アーティストは作品を持って行って見せるだけでなく、一つの文化の種をまくこともできるのです。

最後に、私の花火を見た多くの人は圧倒され興奮します。実際に北京オリンピックで天安門広場の夜空に浮かんだ五輪を見て、世界中の人々が驚き歓喜しました。アートは「人々の喜びを呼ぶ」のです。

私は、アートは使えるものではないけれども、さまざまな可能性を秘めていると思います。皆さん、もっと美術館に行つて、「こういう作品もある!」「こんなこともしている!」と現代美術に触れて楽しんでください。



ゲストスピーカー

牧陽一氏 (埼玉大学教養学部教授)



蔡さんの作品のテーマは「和解」だと思います。たとえば、火薬を戦争でなく平和のために使い、民族を隔てるのではなく和解のために万里の長城を使う。そして、世界中で大きな美術館で展覧会をすると同時に、いろんな地域で作品を作る。近代美術と現代美術の和解、グローバリズムとローカリズムの和解を求めているのだと感じました。

ゲストスピーカー

黒田 雷児氏 (福岡アジア美術館学芸課長)



従来の現代美術の方法論だけではとらえられない蔡さんの作品は、近代美術と現代美術という二元論を無化するとともに、芸術を無化しているように感じました。すぐには役に立たないようなアートを受け入れるのは、作家ではなく社会の責任であり、いまの日本社会にはそういう余裕がなくなっているのではないのでしょうか。

モデレーター

後小路 雅弘氏 (九州大学大学院教授)



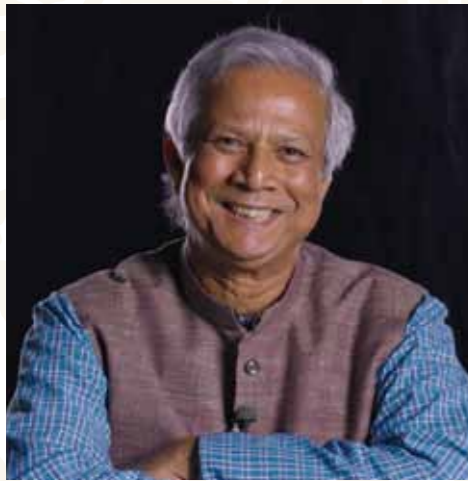
蔡さんの作品を見て、自分にとって受け入れ難いもの、理解できないものを最初から拒否しないことの重要性を再認識しました。それはもちろん美術を鑑賞する上でも大事ですが、美術という枠を超えて自分になじみのない人やものと出会ったときに、受け入れられないという理由でそれを拒否しない姿勢にもつながると思います。

VOICE)))



「地域に文化の種をまく」という話が面白かった。自分の思いを伝える力がすごく強いのだと思いました」仲村明代さん (福岡市早良区)。「自分のやりたいことをして楽しみながら、社会や地域に変化をもたらしているところがとても興味深かったです」兒島理華さん (同市南区)

福岡アジア文化賞20周年記念 ムハマド・ユヌス氏講演会



開催日／9月27日
会場／都久志会館大ホール
参加者／500人

1940年バングラデシュ・チッタゴン生まれ。
バングラデシュの貧困な農村女性を対象に、無担保で小額の融資を行うグラミン（村落の意）銀行を83年創設。貧困からの脱却と女性の経済的自立を支援する有力なモデルとして世界に大きな影響を与え、2001年に福岡アジア文化賞「大賞」を受賞、06年にはグラミン銀行とともにノーベル平和賞を受賞した。
現在はグラミン銀行のモデルを発展させた「ソーシャル・ビジネス」を提唱している。これは株主利益の最大化ではなく、社会的利益の最大化を目標とする企業体。会社を持続させるための収益を確保しながらも、医療、環境、教育などさまざまな社会問題の解決に貢献しようというもので、新たな資本主義ビジネスの概念として脚光を浴びている。

冒頭で、九州大学のアシル・アハメッド氏と大杉卓三氏がスライドを使って「ユヌス氏とグラミンの取り組み」を紹介。続く第1部はムハマド・ユヌス氏の基調講演、第2部は九州大学副学長の安浦寛人氏とアシル・アハメッド氏を加えた3人の対談。最後に、グラミンと九州大学の共同ラボ設立検討のための覚書の締結が行われました。



第1部 基調講演 機会さえあれば、 貧困から抜け出せる

私が福岡アジア文化賞の大賞を受賞した2001年、バングラデシュは大洪水に見舞われました。グラミン銀行の借手手の半数以上が家や職を失うという壊滅的な被害で、ヨーロッパのメディアは「これでグラミン銀行は終わった」と報じたほどです。今、徐々に復興してきていますが、洪水や台風などの脅威にさらされている状況は同じで、地球温暖化で海面が上昇すれば、国土の5分の1が失われるだけでなく、農業もできなくなってしまいます。世界全体が深刻な危機をはらんでいる今、地球を守るために私たちは、ほかの人に害をもたらさない生き方をしていかなければなりません。

グラミン銀行は今、月に約1億ドルの貸し付けをしています。あらゆる農村に支店を持ち、800万人以上に融資を行っています。その97%が女性で、多くは読み書きができませんが、そ

の子どもたちは全員就学しており、奨学金や教育ローンを活用して高等教育を受けている者も少なくありません。貧しい家庭の中で、新しい世代の子どもが育っているのです。読み書きができないのは、社会が学校へ行く機会を与えなかったからです。貧困は貧しい人がつくり出したものではなく、周囲を取り巻く制度がつくり出したもの。能力に差はなく、機会さえ与えられれば貧困から脱することができるのです。

担保のない人たちも、銀行から融資を受けてお金と信頼を手にし、借りたお金を返済しながら生きていけます。グラミン銀行が実践してきた、このマイクロ・クレジットのプログラムは、今ではアジア、アフリカ、南米の国々、さらにはニューヨークをはじめとするアメリカ各地でも採用されています。従来の金融制度は、世界人口の3分の2を占める貧困層への基本的サービスを否定し、融資の道を閉ざしてきました。このやり方では、貧富の差が拡大するばかりです。偏った概念が金融危機をもたらしている今こそ、世界全体の金融制度を見直すチャンスではないでしょうか。



社会問題をソーシャル・ビジネスで解決

人間には、利己主義の面もあれば、公平無私の側面もあります。そこで私たちは、この無私を持ったビジネス、いわゆるソーシャル・ビジネスをバングラデシュに立ち上げました。フランスの企業との合弁会社で、「グラミン・ダノン」は栄養不良の子どもたちに栄養素を補給すること、「ベオリア」はヒ素を含まない安全な飲料水を提供することを目的としています。どちらも利益以上に人々の状況改善を追求しており、貧困層のために、より安価で安全で良質な製品づくりを行い



ながら、財務的自立も目指しています。ほかに、医療従事者を育てる看護学校も立ち上げようとしています。

今、日本をはじめ世界各地でソーシャル・ビジネスへの関心が高まっています。テクノロジーを駆使して、社会問題を解決する事業が世界中で展開されるようになれば、貧困や疾病など、私たちを取り巻くあらゆる問題は存在しなくなるに違いありません。貧困は過去の遺物として、博物館でしか見られないものになる。そんな日が来ることを、私は心から願っています。



第2部 対談 貧困の解消—このために 私たちはどんな社会をつくらなければならないのか

ムハマド・ユヌス氏
(グラミン銀行総裁)

日本人がリーダーシップを発揮してソーシャル・ビジネスのトップに立てば、世界は大きく変わることでしょう。これからは資本の時代ではなく、創造性の時代です。子どもたちにソーシャル・ビジネスの意義や機能を伝え、ビジネスの選択肢の一つとして位置付けていきたい。若者の興味や関心を解き放ち、その創造力や革新力を尊重したいものです。自らの可能性を信じ「より良い世界をつくる」という信念を持って努力すれば、夢は必ず実現します。技術は、彼らの味方です。



安浦 寛人氏
(九州大学理事・副学長)

ユヌス先生が提唱されるソーシャル・ビジネスの無私精神は、古い日本人の感覚に非常に近いのではないのでしょうか。今、九州大学とグラミンの共同プロジェクトが始まろうとしています。ソーシャル・ビジネスの研究や普及に取り組む「グラミン・クリエイティブ・ラボ」と、開発途上国向けの技術や製品を開発する「グラミン・テクノロジー・ラボ」です。これらの研究成果が、やがて世界をリードし、多くの人々に役立つことを期待しています。



アシル・アハメッド氏
(九州大学大学院 システム情報科学研究院 特任准教授
/グラミンコミュニケーションズプロジェクトディレクター)

九州大学では、「バングラデシュの各村が情報サイトを所有し、村人がその情報をもとに収入を得る」ための研究活動にも取り組んでいます。これは、私が留学中に滞在した大分の一村一品運動がヒントになりました。また、最先端の技術を駆使したグラミン銀行の多目的電子通帳も研究・開発中で、まもなく世界に先駆けて実用化できる見通しです。

VOICE)))



「もっと素晴らしい世界をつくるのが夢なので、とても大きな力になりました」イーデン・クウェイルさん（福岡市西区）。「ビジネスの本質を教わった気がして、これからの生き方を考えさせられました」田中由佳さん（福岡県みやま市）



授賞式

開催日／9月17日(木) 会場／福岡国際会議場

秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、市民や留学生、文化関係者など約1,000人が参加し、20回の節目を飾る授賞式が行われました。

第1部では、和服姿の筑紫女学園大学アジア文化学科の学生にエスコートされながら受賞者が入場。吉田宏市長と鎌田迪貞よかトピア記念国際財団理事長から賞状とメダルが贈呈されると、各受賞者は受賞の喜びや市民へのメッセージなどを思い思いの言葉でスピーチ。福岡インターナショナルスクールの子どもたちによる微笑ましい花束贈呈で締めくくりました。

第2部は司会の楠田枝里子さんと受賞者との対談で幕開け。子ども時代のエピソードや日本の魅力、アジア文化への思いなどトークは和やかに進み、時折会場から笑い声がこぼれる楽しい場面も。対談後は市民を代表して、西南学院大学学生の佐野友紀さんがお祝いの言葉を述べ、最後は作曲家・三木稔氏の代表作の歌劇「ワカヒメ」をオペラ歌手の宇佐美瑠璃さんが披露し、美しい歌声に会場全体が酔いしれました。



吉田市長のご挨拶



鎌田理事長より賞の贈呈



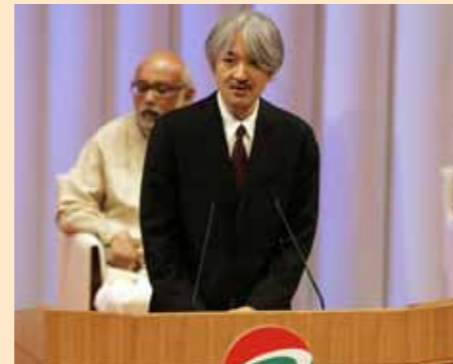
司会の楠田枝里子さん



三木稔氏代表作オペラ「ワカヒメ」

秋篠宮殿下のお言葉(抜粋)

アジアには多様な風土が作り出し、長い歴史の中で育んできた各地域固有の文化が息づいています。私自身、アジアを旅するうちに、その深さや豊かさに感銘を受けるとともに、それらを保存し、継承していくことが大切であるとよく感じます。このような時代にあって、福岡アジア文化賞はアジアの固有で多様な文化の保存と継承、そして創造に貢献するものであり、大変意義深いものと考えます。本日受賞される方々の優れた業績は、この時代に生きる人々のみならず、次の世代の人々とも共有する人類の貴重な財産になるのではないかと思います。



祝賀会

授賞式後に関係者が集まって開かれた祝賀会はくつろいだ雰囲気の中で進みました。在大阪・神戸フランス総領事館のフィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ総領事が祝辞を述べ、各国の代表者や福岡の参席者とともに受賞者の功績を称えました。



国内・海外記者会見 および報道実績

第20回受賞者決定直後の6月8日(月)に福岡で記者会見を行い、受賞者および選考経過、受賞理由などを発表しました。その後、6～7月にかけて各受賞者の地元で記者会見を行いました。会見の様子が、さまざまな媒体を通して世界へ大きく報じられました。



パリでのベルク氏の記者会見



北京での蔡氏の記者会見



東京での三木氏の記者会見

海外記者会見実績

受賞者氏名	都市名	開催日	参加者数	主な来賓・出席者など
オギュスタン・ベルク	パリ	6/25(木)	50人	●クリスティアン・ソテール氏(パリ市副市長) ●渡邊啓貴氏(在仏日本国大使館公使)
三木 稔	東京	7/23(木)	30人	●中藤泰雄氏(株)ジャパン・アーツ代表取締役会長 ●落合 良氏(結の会会長)
蔡 國強(ツァイ・グオチャン)	北京	7/30(木)	90人	●王 文章氏(中国文化省副大臣) ●泉 裕泰氏(在中国日本国大使館公使) ●王 仲殊氏(第7回大賞受賞者) ●莫 言氏(第17回大賞受賞者)

※パルタ・チャタジ氏の海外記者会見は開催されませんでした

その他広報活動

ホームページ、メールマガジン、新聞広告など各種媒体を活用し広報しました。また、各関係機関・団体、大学、飲食店などにチラシ配布を協力いただき、参加者募集を行いました。

福岡アジア文化賞ホームページおよびメールマガジン「アジアの風だより」

<http://www.asianmonth.com/prize>

福岡アジア文化賞ホームページでは、81人の歴代受賞者について、その人物像や福岡での日々を紹介しています。アジアが誇る文化の巨人たちの記念講演やシンポジウムの記録を第1回から公開し、珠玉の言葉を今に伝えるアーカイブ。より深く知りたい人のための書籍通販コーナーや市民が見て感じた文化賞体験記など。最新のイベント情報や受賞者の横顔をお届けするメールマガジン「アジアの風だより」の発信とともに、福岡アジア文化賞の魅力余すところなく紹介しています。





福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

第1回 1990



創設特別賞

巴金 BA Jin
(中国/作家)

「家」「寒い夜」など、深い人類愛のあふれる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。



創設特別賞

黒澤明 KUROSAWA Akira
(日本/映画監督)

「羅生門」をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えて映画人に大きな影響を与えた。

第1回 1990



創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム Joseph NEEDHAM
(イギリス/中国科学史研究者)

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。



創設特別賞

ククリット・プラモート Kukrit PRAMOJ
(タイ/作家・政治家)

大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をもった文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

第1回 1990



創設特別賞

矢野暢 YANO Toru
(日本/社会学者)

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991



大賞

ラヴィ・シャンカール Ravi SHANKAR
(インド/音楽家・シタール奏者)

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。



学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ Taufik ABDULLAH
(インドネシア/歴史学者・社会学者)

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

第2回 1991



学術研究賞

中根千枝 NAKANE Chie
(日本/社会人類学者)

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」など独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。



芸術・文化賞

ドナルド・キーン Donald KEENE
(アメリカ/日本文学・文化研究者)

大著「日本文学史」をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

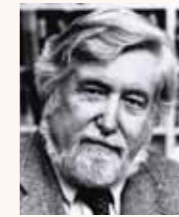
第3回 1992



大賞

金元龍 KIM Won-yong
(韓国/考古学者)

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。



学術研究賞

クリフォード・ギアツ Clifford GEERTZ
(アメリカ/文化人類学者)

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

第3回 1992



学術研究賞

竹内實 TAKEUCHI Minoru
(日本/中国研究者)

社会科学・文学・思想・歴史にわたる総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。



芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン Leandro V. LOCSIN
(フィリピン/建築家)

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993



大賞

費孝通 FEI Xiaotong
(中国/社会学・人類学者)

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。



学術研究賞

ウンク・A・アジズ Ungku A. AZIZ
(マレーシア/経済学者)

マレーシアの実証的研究に優れた業績を挙げた経済学者。

第4回 1993



学術研究賞

川喜田二郎 KAWAKITA Jiro
(日本/民族地理学者)

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的にとらえ、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。



芸術・文化賞

ナムジリン・ノロバンザト NAMJILYN Norovbanzad
(モンゴル/声楽家)

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力をもつ、傑出した声楽家。

第5回 1994



大賞

スパトラディット・ディッサクン M.C. Subhadradis DISKUL
(タイ/考古学・美術史学者)

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的な位置づけに果たした功績は偉大。



学術研究賞

王廣武 WANG Gungwu
(オーストラリア/歴史学者)

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

第5回 1994



学術研究賞

石井米雄 ISHII Yoneo
(日本/東南アジア研究者)

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。



芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム Padma SUBRAHMANYAM
(インド/舞踊家)

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の創立など教育面にも貢献。

第6回 1995



大賞

クンチャラニングラット KOENTJARANINGRAT
(インドネシア/文化人類学者)

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。



学術研究賞

韓基彦 HAHN Ki-un
(韓国/教育学者)

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

第6回 1995



学術研究賞

辛島 昇 KARASHIMA Noboru
(日本/歴史学者)

刻文資料に通曉し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。



芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク Nam June PAIK
(アメリカ/ビデオアーティスト)

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオアートの世界的第一人者。

第7回 1996



大賞

王 仲殊 WANG Zhongshu
(中国/考古学者)

古代日中交流史の研究に顕著な業績を挙げるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。



学術研究賞

ファン・フイ・レ PHAN Huy Le
(ベトナム/歴史学者)

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

第7回 1996



学術研究賞

衛藤 藩吉 ETO Shinkichi
(日本/国際関係研究者)

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。



芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン Nusrat Fateh Ali KHAN
(パキスタン/カワワーリー歌手)

イスラム宗教歌謡カワワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997



大賞

チェン・ボン CHHENG Phon
(カンボジア/劇作家・芸術家)

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。



学術研究賞

ロミラ・ターパル Romila THAPAR
(インド/歴史学者)

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を変えた女性歴史学者。

第8回 1997



学術研究賞

樋口 隆康 HIGUCHI Takayasu
(日本/考古学者)

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。



芸術・文化賞

林 権澤 IM Kwon-taek
(韓国/映画監督)

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998



大賞

李 基文 LEE Ki-Moon
(韓国/言語学者)

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。



学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア Stanley J. TAMBIAH
(アメリカ/人類学者)

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

第9回 1998



学術研究賞

上田 正昭 UEDA Masaaki
(日本/歴史学者)

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。



芸術・文化賞

R. M. スダルソノ R. M. Soedarsono
(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を挙げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999



大賞

侯 孝賢 HOU Hsiao Hsien
(台湾/映画監督)

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛をもって「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。



学術研究賞

大林 太良 OBAYASHI Taryo
(日本/民族学者)

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究者の泰斗。

第10回 1999



学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン Nidhi EOSEWONG
(タイ/歴史学者)

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。



芸術・文化賞

タン・ダウ TANG Da Wu
(シンガポール/ビジュアルアーティスト)

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000



大賞

プラムディヤ・アナンタ・トゥール Pramodya Ananta TOER
(インドネシア/作家)

「人間の大地」をはじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。



学術研究賞

タン・トゥン Than Tun
(ミャンマー/歴史学者)

厳密で実証的な歴史学の方法論により、ミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

第11回 2000



学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン Benedict ANDERSON
(アイルランド/政治学者)

世界規模の比較歴史的研究を推進し、「想像の共同体」でナショナリズム研究に新局面を開いたアイルランドの政治学者。



芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット Hamzah Awang Amat
(マレーシア/影絵人形遣い)

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第12回 2001



大賞

ムハマド・ユヌス Muhammad YUNUS
(バングラデシュ/経済学者)

「グラミン銀行」を創始し、マイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。



学術研究賞

速水 佑次郎 HAYAMI Yujiro
(日本/経済学者)

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

第12回 2001



芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー Thawan DUCHANEE
(タイ/画家)

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。



芸術・文化賞

マリルー・ディアス=アバヤ Marilou DIAZ-ABAYA
(フィリピン/映画監督)

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通して、アジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002



大賞

張 芸謀 ZHANG Yimou
(中国/映画監督)

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。



学術研究賞

キングスレー・M・シルワ Kingsley M. DE SILVA
(スリランカ/歴史学者)

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて、歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

第13回 2002



学術研究賞

アンソニー・リード Anthony REID
(オーストラリア/歴史学者)
「大航海時代の東南アジア」などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を開いたオーストラリアの歴史学者。



芸術・文化賞

ラット Lat
(マレーシア/マンガ家)
マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な風刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003



大賞

外間 守善 HOKAMA Shuzen
(日本/沖縄学者)
「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に、常に沖縄研究をリードしてきた研究者。



学術研究賞

レイナルド・C・イレート Reynaldo C. ILETO
(フィリピン/歴史学者)
東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

第14回 2003



芸術・文化賞

徐 冰 XU Bing
(中国/アーティスト)
独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通して東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。



芸術・文化賞

ディック・リー Dick LEE
(シンガポール/シンガーソングライター)
シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティーを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004



大賞

アムジャッド・アリ・カーン Amjad Ali KHAN
(インド/サロッド奏者)
インド古典弦楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。



学術研究賞

厲 以寧 LI Yining
(中国/経済学者)
中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

第15回 2004



学術研究賞

ラーム・ダヤル・ラケーシュ Ram Dayal RAKESH
(ネパール/民俗文化研究者)
ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。



芸術・文化賞

ローランド・シルワ Roland SILVA
(スリランカ/文化遺産保存建築家)
イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務め、アジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005



大賞

任 東権 IM Dong-kwon
(韓国/民俗学者)
韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。



学術研究賞

トー・カウン Thaw Kaung
(ミャンマー/図書館学者)
貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績を挙げた図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

第16回 2005



芸術・文化賞

ドアンクワン・ブンニャウォン Douangdeuane BOUNYAVONG
(ラオス/織物研究者)
ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。



芸術・文化賞

タシ・ノルブ Tashi Norbu
(ブータン/伝統音楽家)
ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるバイオリン奏者。

第17回 2006



大賞

莫言 MO Yan
(中国/作家)
現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。



学術研究賞

シャグダリン・ビラ Shagdaryn BIRA
(モンゴル/歴史学者)
世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

第17回 2006



学術研究賞

濱下 武志 HAMASHITA Takeshi
(日本/歴史学者)
アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。



芸術・文化賞

アクシムフティ Uxi MUFTI
(パキスタン/民俗文化保存専門家)
「ローク・ヴィルサ」を創設し、パキスタン文化の基盤を実証的に追求し続ける民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007



大賞

アシシュ・ナンディ Ashis NANDY
(インド/社会・文明評論家)
臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。



学術研究賞

シーサク・ワリポードム Srisakra VALLIBHOTAMA
(タイ/人類学・考古学者)
関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

第18回 2007



芸術・文化賞

朱 銘 JU Ming
(台湾/彫刻家)
深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求め創造へのエネルギーを併せもつ、彫刻の巨匠。



芸術・文化賞

金 徳洙 KIM Duk-soo
(韓国/伝統芸能家)
「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008



大賞

アン・ホイ Ann HUI
(香港/映画監督)
幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のバイオリン奏者。



学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ Savitri GOONESEKERE
(スリランカ/法学者)
南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

第19回 2008



学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン Shamsul Amri Baharuddin
(マレーシア/社会人類学者)
民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。



芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン Farida Parveen
(バングラデシュ/音楽家)
バングラデシュの伝統的な宗教歌謡パウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

